

医療新世紀

情報共有、すぐに対応

広がる「チーム医療」

医師だけでなくさまざまな職種が、各自の専門性を発揮しながら連携を図る「チーム医療」が広がっている。治療やケアが複雑化、高度化する中で、医師にすべてを任せるとはならず、情報を共有しながら多くのスタッフがかわり、患者の安心につなげようとしている。

1月下旬 広島大病院の9階東病棟。午前8時半すぎ、乳がん患者の病室を9人の医療スタッフが回診し始めた。教授を先頭に、医師らが続く。大学病院の回診のイメージとは様子が違う。病棟や外来の看護師、薬剤師、リハビリエーター、作業療法士も加わった。3日前に乳房の摘出手術を受けた50代のAさんに、乳癌外科の村上茂講師らが次々と話しかける。スタッフは回診前の打ち合わせで、対象者全員の容体や治療計画を把握して



乳がん手術後の入院患者を、多職種チームで回診する広島大病院の村上茂・乳癌外科講師（左から2人目）ら。広島市の同病院

「誰が誰のために、何のために回診をするのかを考えたらこうなつた」と、チームをつくった村上さん。一緒に回診することで、患者が何を求め自分たちは何をすべきか、その場に対応できるという。Aさんも「いろんな方々が自分のことを気に留めて、理解してくれている安心感がある。この病室はこれからは多職種のかかわりが求められる。家族や患者団体、行政など、医療従事者以外の支援も含めてチーム医療という考えです」。

九州のがん専門病院に勤務していた10年ほど前、外来から入院患者の診療、手術と仕事が集中。十分な対応ができていない自分と限界を感じ、チーム医療の必要性を認識したという村上さん。母校の広島大に戻った翌年の2006年、チーム医療を構築し世界的に知られる米テキサス州のMDアンダーソンがんセンターに短期留学。医師や看護師、薬剤師に、それぞれ助手の役割をする専門職がつくなど、一人一人の負担を軽減しながら高度な医療サービスを提供する現場を目の当たりにした。

多職種参加で回診



日本の同じ規模の専門病院と比べると、同がんセンターの医師や看護師の数は6〜7倍。薬剤師は70倍、総収入も10倍以上。「スタッフの数や資金力はともまわれないが、職種を超えて互いに信頼し、意見を出し合うコミュニケーションの実践なら日本でもできる」。こう考え、帰国後にスタッフに声をかけた。さまざまな職種が、さまざまな場面で得た情報をスタッフに共有される。村上さんは「極が咲くころにはおさんの抱っこもOKだよ」と声をかけた。Bさんの笑顔で、メンターの顔もほころんだ。

「この職種の人と話すのは初めて」といふスタッフもいた。自分がかかわる医療についてオープンにもが言える意識が生まれ、医療の向上につながったと、村上さん。08年にはチーム回診もスタートした。チームでの取り組みについて、増岡夏美看護師は「昼間は「大丈夫」と話していた人が夜になって不安を訴えることもある。入院患者さんとかかわる機会が、一番多い者として、さまざまな場面で得た情報をスタッフに共有される。村上さんは「極が咲くころにはおさんの抱っこもOKだよ」と声をかけた。Bさんの笑顔で、メンターの顔もほころんだ。

専門職団体が協議会を設立



「チーム医療推進協議会」が開いたシンポジウム。1月30日、横浜市鶴見区の鶴見大学会館

「ワーカー」や、がん治療などの後遺症のリハビリをケアする「リンパドレナージュセラピスト」、医療機器を扱う「臨床工学技士」など、看護師や薬剤師に比べなじみが薄い職種も参加している。

医療機関でチーム医療を担うさまざまな専門職の団体が「チーム医療推進協議会」を設立した。互いの役割や仕事の内容を知り、広くアピールしていくことを目的にしており、患者会なども加わっている。

協議会を構成する医療専門職の団体数は13（1月末現在）。困りごとや悩みの解決に当たる「医療ソーシャル

チーム医療の分野と、推進協議会に参加する医療従事者の団体

分野	参加団体
医療安全管理	日本医療社会事業協会
感染症対策	(医療ソーシャルワーカーの団体)
栄養管理	日本医療リハビリテーション協会
摂食・嚥下(えんげ)	日本栄養士会
呼吸ケア	日本看護協会
褥瘡(じよくそう)管理	日本言語聴覚士協会
皮膚・排せつケア	日本物理療法士協会
リハビリ	日本放射線技師会
緩和ケア	日本病院薬剤師会
糖尿病療養	日本病院会
など	日本放射線技師会
	日本理学療法士協会
	日本臨床工学技士会

(チーム医療推進協議会の資料から)

重要さ増す看護師、薬剤師

広島大病院の乳がんのチーム医療は、入院患者だけが対象ではない。病状や手術、薬の副作用への不安、悩みなどを細かくサポートしていく上で、外来でも看護師や薬剤師が医師以外のスタッフの重要な一角にある。看護相談室。診察を終えた患者の多くが一度はここを訪れる。相談を担当するのは、チームのメンバーでもある外来の看護師だ。その一人、山口真由美さんは「医師は診察時にはなかなか十分な時間がとれない。ここならゆつくりいろいろな話ができる」と話す。人工乳房やかつらの相談をしたり、さまざまな悩みを打ち明けた。時には、乳房を温存する治療と全摘手術のどちらを選択すべきかといった質問も出るが、「私が答えを出すのではなく、なぜそのことを聞くのか、気持ちや考えを聞き取り、患者さんが自分で考える手助けを

互いを知り、広く啓発へ

「互いを知り、広く啓発へ」をテーマに、協議会が主催するシンポジウムやセミナーを開催している。協議会代表の北村善明・日本放射線技師会会長は「現場は過剰労働などの問題も抱えていきたい。医療の進歩をおい、効果的なチーム医療を行くための体制を引き上げなども課題整備を国などに求めて